二〇一二年六月四日 開催

東日本大震災から1年

報道と支援活動をふり返る

山本みき(本学英米語学科〔通訳翻訳課程〕三年授)、リンダ・オーハマ(日系カナダ人映画監督)、■パネリスト……水野孝昭(本学アジア言語学科教

■コメンテーター……小菅伸彦(本学アジア言語学科

■司会・通訳・コーディネーター……矢頭典枝(本学単司会・通訳・コーディネーター……矢頭典枝(本学

(本学英米語学科〔通訳翻訳課程〕四年生)オーハマ氏へのウィスパリング通訳……小野尾光平

津波で壊滅した町を回った。

※肩書は講演会開催当時(以下同)

つながること――3・11後のメディア(水野孝昭

町を基点に、釜石、大槌、大船渡、陸前高田、気仙沼など、下旬に、災害救援で来日中だった米国の国際開発庁(USA下旬に、災害救援で来日中だった米国の国際開発庁(USA下旬に、災害救援で来日中だった米国の国際開発庁(USA下旬に、災害救援で来日中だった米国の国際開発庁(USA下旬に、災害救援で来日中だった米国の国際開発庁(USA下旬に表れない。三陸地域の救援拠点となっていた岩手県の遠野に走れない。三陸地域の救援拠点となっていた岩手県の遠野に走れない。三陸地域の表情の表情が発生して一カ月余りたった二〇一一年四月東日本大震災が発生して一カ月余りたった二〇一一年四月東日本大震災が発生して一カ月余りたった二〇一一年四月東日本大震災が発生して一カ月余りたった。

場や病院の建物のドアや窓がすべてぶち抜かれて空洞となり、限り一面の茶色いがれきの集積に変わり果てていたのだ。役をのんだ。海岸線まで広がっているはずの町並みが、見渡す山間の道を抜けていくと、いきなり視界が開け、思わず息

向こう側が見えている。 られて、 突き刺さったように空を斜めに切り裂いてい ガソリンスタンドの鉄柱がねじまげ

「ジャカルタ大津波の現場も行ったけれど、こんなひどい光 残骸や焦土、泥まみれの破壊の痕跡が延々と続いている。 以外は、 景が繰り返し現れてくる。 沿いの丘を越えるごとに、 人の気配は皆無だ。人々の生活の痕跡を飲み込んだ レスキュー関係者と時折すれ違う 何度も何度も、 同じ無残な光

なってしまっている……」---てきたUSAIDのスタッフも茫然と語った。 世界各地で災害救援に当たっ

景は初めてだ。役場や病院もそろった町が、丸ごと残骸

に

ぎりぎりの状態に置かれた人たちが、自分たちの状態を訴

思ったのだ。

人に自分たちの作った貼り紙を見てもらいたいのだろう、

高台にある避難所の入り口の壁には、手書きの「尋ね

んでいる男性だった。それぞれ行方不明になった日時と経緯 示していた。その隣の写真は、セーター姿の、穏やかに微笑 真では、こぼれるような笑顔の女子高校生がピースマークを の貼り紙がびっしりと並んでいた。「尋ね人」の貼り紙の写

服装や体の特徴などが詳しく記してあり、「心当たりのある 方は連絡してください」と電話番号が記されている。

り紙に込められているのがつたわってくる。 貼り紙だったのだ。残されたものの切実な思い りとして、家族が一縷の望みを託して作ったのが、 死の境目で離れ離れになってしまった肉親を探す手が が、 手作りの 一枚の貼 か

私たちもそれらの貼り紙を携帯電話で撮影して、

ネットの

入手しなければならなくなり、

ふだんメディアで流されてい

行方不明の家族を探している当事者たちは、一人でも多くの き違いや重複を避けることができるだろうと考えた。 う形で「尋ね人」の記録が一覧化されるだけでも、 その効果があったかはわからない。 行方不明者消息情報の集積サービスあてにメールで送った。 だが、デジタル情報と 確認 何より

うに広く伝えていく。 いわば 者たちが精一杯の肉声で叫び、それを受け止めた人たちが、 メッセージに共感した人たちが、その輪を広げていく。 えるために、手作りのメディアで表現し、 「拡声器」の役割として、その声をバケツリレー 発信する。

人

験だった。 これがメディアという活動の原点だ、 と痛感させられ た経

慣れてきた「ニュース」の意味づけをガラリと一変させられ だが、災害の当事者になってしまったとき、人はそれまで見 の思い込みに基づいてニュースの価値づけを行なっている。 者・視聴者の関心」という主観的なモノサシを持つ「プロ」 てしまう。自分や周囲の人々の生存にかかわるような情報を 報道機関は通常、 当事者の思いとは かかわわ りなく、「読

べ」という各被災地の収容人数を並べた一覧表をあげること

各学校や公民館などにそれぞれ

何

人が避難してい

の全体像を示していたわけではない。

かできなか

.. つ

た報道として、たとえば

避

難所

状況調

ずか数十字の「号外」

情報は当然ながら断片的で、

被災

とはいえ、『日日新聞

ラバラになっていた状況のなかで、

地域の人々には最も必要

るのか、

これは突然の災害によって、

家族・親戚

・縁者が、

バ

る大衆消費 く変わってくるからだ。 気の一 般情報とは、 求める情報の優先順位がまった

巻日日新聞』である。 行して、六つの避難所に貼り出した。 ら記者たちはマジックペンを使って手書きの 通常の新聞の発行は不可能となった。だが、翌三月十二日か 屋も被災し、 にも紹介されて国際的に有名になった、宮城県石巻市の ての役割を果たした一つの例が、『ワシントン・ポスト』 検証してみよう。 の制限のもとで、どんなニュースを絞り込んで報道したか、 3 プロ」でもある被災地の報道機関が、 の後の極限状況のなかで、 社内の輪転機が水をかぶったうえ停電になり、 過酷な条件のもとでも地 三月十一日の大地震と津波で社員も社 当事者であり、 毎日、 限られたリソース 域の報道機関とし 貼り出しの 「壁新聞」 情報 を発 選別 岩 紙

د يا

当事者のニーズを一番に反映したものと受け止められたに違 記者たちが、 た大半の避難者たちに共有されていたわけではない。 セスはもちろん、 行政の当局者は把握していても、 な基本情報であったと言えるだろう。だが、こうした情報は ない。 自分たちの目線に立って伝えてくれる情 テレビ・ラジオすら視聴する機会が 携帯電話やネットへ 地元の なかっ 0 アク

|月十二日以降の「号外」の主見出しは、 以下のとおりだ。

日本最大級の地震・大津波」(十二日

各地より救援隊到着」(十三日

全国 [から物資供給」(十四日

ボランティアセンター設置、安否情報を放送」 (十五日)

「支え合いで乗り切って」(十六日

街に明り広がる、電気復旧一万戸超す」(十七日

などが、避難所の人々の最大の関心事だったことを物語 以降の見出しも、 マジックペンで「M9」と訂正してあるのが生々 は 13 . る。 十二日 「M8・8」と青い字で書いていたのが、 十七日の「街に明り広がる」という見出しからは、 の壁新聞 救援隊や救援物資の到着や安否情報 は、 地震のマグニチュードにつ その i ζJ 上から赤 て の放送

dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2623219)。 また、『ワシント 災から一週間を迎えて、やっと復旧に向かおうという被災者 3・11災害をめぐる日本の報道の貴重な記録として、 news/2011/04/ishinomaki-hibi-shimbun.html)。 現 「Newseum」が、ただちにこれらの「号外」の収蔵を決定 どういう思いで過ごしていたかを如実に記録していると言え 歴史的な大災害に見舞われた当事者たちが、直後の一週間を たちの気持ちがうかがえる。これら六枚の壁新聞の見出しは、 DCにあるニュースとジャーナリズムの総合博物館 ン・ポスト』紙の報道がきっかけとなって、米国ワシントン るだろう。この「号外」は国会図書館のデジタルアーカイブ に収蔵され、誰でもネットで閲覧することができる(http:// 同年五月から展示した (http://www.newseum.org/ 、同博物 在 Ł

Newseumのウェブサイトには、"The newspapers are a Newseumのウェブサイトには、"The newspapers are a and to journalists' commitment to providing that information." (これらの新聞は、知ることへの人々のつねに変わらない必要性と、それにこたえようとするジャーナリに変わらない必要性と、それにこたえようとするジャーナリ

館に展示されている。

TOHOKU-CANADA Connections

(リンダ・オーハマ、

執筆=矢頭典枝

《冒頭で、オーハマ監督が制作した〝From the Rest of the World──カナダより愛をこめて〟と題するパワーポイント映像が上映され、三月十一日の震災発生直後、カナダになわれた支援活動の様子が写真によって紹介された。このなかで、オーハマ監督が中心となって展開してきた「布の手紙 cloth letter」活動がフォーカスされた》

は春をなくしたが、夏の暑いその日、その花は力強く、たくは春をなくしたが、夏の暑いその日、その花は力強く、たくは春をなくしたが、夏の暑いその日、その花は力強く、たくは春をなくした。あまりの被害の酷さに声も出なかった。と泥に愕然とした。あまりの被害の酷さに声も出なかった。と泥に愕然とした。あまりの被害の酷さに声も出なかった。と泥に愕然とした。あまりの被害の酷さに声も出なかった。と泥に愕然とした。あまりの被害の酷さに声も出なかった。と泥に愕然とした。そして、七月と八月の約二カ月間、被災地でテントを張って生活し、支援活動を行なった。

東日本大震災から1年



水野孝昭先生



開会の辞を述べる、酒井邦弥学長 (兼グローバル・コミュニケーション研究所所長)



大津波にあった町の一部は、 浸水したままだった (宮城県気仙沼市)



ねじまげられた鉄柱が、地震と津波の破壊力を物語る(岩手県大船渡市)



家の残骸から出てきた泥だらけのアルバム(以上、撮影=水野孝昭)



建物が無残に倒壊した宮城県女川町の 被害状況



リンダ・オーハマ監督



瓦礫のなかに咲く、一輪のアヤメの花(名取市閖上地区)

何ができるのか、を考えていたようだった。

ることがあって幸せだ、と言った。ないものを嘆くよりも、

くっているのだ、と。

持って帰ってくるヒモやロープを使って、ブレスレットをつ避難所でともに生活する人たちが瓦礫のなかから見つけて

自分は家をなくしたが、こうして、

震災のときの津波で足が不自由になったため、

外に出られず

聞けば、

彼は、 限の状況のなかでも、 ととは、 は、 娘の父親を十二年間やってきたのですから」と。 れるのですか」と尋ねた。すると「私はむしろ幸せ者です。 してくれた。「娘さんを失ったのに、なぜ笑顔で教え続けら しかし、彼はまばゆい笑顔で生徒たちと接し、私にも親切に 失った。その教諭の娘もその小学校で津波の被害に遭った。 いたとしても、 石巻市立大須中学校の男性教諭と一緒に大川小学校を訪れ 私は東北の人々からは教わることが多かった。 この小学校は全校生徒一〇八名のうち七四名を津波で 持っていないものについて不満を言ったり、 持っていることに対して感謝していた。 娘と過ごした十二年間である。 もっと欲しいと思ったりすることが多いが、 真の笑顔 (genuine smile) を見せる。 持っているこ これほど極 何か持って 私たち人間

ましく咲い

ていた。

宮城県石巻市の避難所を訪問した。蒸し暑い避難所のなか

一人の女性がしゃがみ込んで何かをしていた。

うとする、そのような人々に感銘を受けた。失ったものを嘆くよりも、すべてに感謝し、前向きに生きよ

度は、 それらを東北の被災地の小学校や中学校で展示し、被災地の 人々が一つ一つ繋ぎ合わせ、三枚の巨大なキルトをつくった。 枚もの布のメッセージが寄せられ、 東北の子供たちへ、励ましのメッセージを二十五センチ四方 Project で使っている「布の手紙」は、カナダの子供たちが キルト」が何枚もできた。 のメッセージを布に描き、「東北からカナダの子供たちへの 子供たちを励ましてきた。この活動は新たな展開を見せ、 の布に描いたものである。二カ月間でカナダ全国から七○○ が 被災地の子供たちがカナダの子供たちに対して、 展開している Japan-Canada Kids for Kids それらをボランティアの お礼 今

いいのではないだろうか。ちを表している。これは「子供たちのメディア」といってもちを表している。これは「子供たちのメディア」といってもこの運動は、支援活動に関わりたいと思う子供たちの気持

し、二〇一四年に公開予定である》 no Shingetsu"(『東北の新月』)は二〇一三年に撮影を終了題材にしたドキュメンタリーの撮影を開始した。"Tohokuず、支援活動に専念したが、二〇一二年末、東日本大震災をず、支援活動に専念したが、二〇一二年末、東日本大震災を

宮城県東松島市教育支援ボランティア(山本みき)



山本みきさん



東松島市の子どもたちと

するレクチャーを受け、活動内容を念入りに計画した。援ボランティアであったので、活動前には児童英語教育に関

であった。
あった。
このであった。

子どもたちに大変な精神的打撃と負担を与えるにちがいない。 された。自分の子どものころを考慮しても、子どもは、 ちがいかに過酷な日々を乗り越えてきたかということを知ら になったことや、普段の避難訓練が子どもたちに安全をもた なった。子どもたちはとても元気で、一見、被災地以外の子 (心的外傷後ストレス障害)が出始めたことから、子どもた らしたことだけでなく、震災後、 の笑顔に潜む本当の影を見た。 教頭先生から被災時および被災後の様子を伺い、子どもたち どもと何も変わらないように思えた。 対象に、 育補助活動をした。 「地震の後は津波がくる」という意識が生死の分かれ 動や態度をよく観察しており、さまざまな心情を抱 前中は東松島市立浜市小学校で、 震災の衝撃だけでなく、 英語活動プログラムの提供による教育支援活動を行 午後は市内の仮設住宅に行き、 震災後の家庭環境の変化は、 地震発生時の素早い情報収集 子どもたちの中でPTSD しかし、 授業補助や清掃など教 浜 市小学校の 小学生を 大人 7 道

れができない。一見無邪気で「小学生らしく」過ごしているどもらしく、自分の感情を素直に表に出したいだろうに、そろう、という気持ちの現れであったと考えられる。本当は子自分がパニックになってしまったら大人を困らせてしまうだ子どもたちが震災時にパニックにならなかったというのは、

子どもたちの勇敢さに気づかされた

仮説住宅では、被災された方々の復興に向けた努力を目の仮説住宅では、被災された方々の復興に向けた努力を目の仮説住宅では、被災された方々の復興に向けた努力を目の仮説住宅では、被災された方々の復興に向けた努力を目の

戦場、 とを知らされた。 るとともに、 残っていた家屋の跡から草が生えており、 激しく浮き彫りとなっていた。 特に女川町は、 被災が酷いといわれている宮城県女川町、 活動最終日。 空爆を落とされた後の広島のようだった。 現状からの復興はとても過酷なものだというこ 活動に参加した学生たちの 建物が原型をとどめておらず、震災の爪痕が あえて例えるならば、 時間 石巻市を視察した 強い要望により、 の経過を感じ かろうじて

今回の活動の目的は、子どもの精神的な負担を、教育を通

ーハマ監督の報告では、

重いテーマであるにもかか

わ

はたちが少しでも英語に対して興味を持ち、自分の言葉で、自分の感じたことを世界に発信するようになったときに、支援に成果があったといえるだろう。これから被災地の未来を援に成果があったといえるだろう。これから被災地の未来を援に成果があったといえるだろう。これから被災地の未来を震災や今回のボランティア活動を通して得た教訓を、日本だけでなく世界中の方々に伝えていこうと思う。

は成果が出ないかもしれない。

けれども、

今回

「携わった子ど

すぐに

じて少しでも軽減することであった。教育分野では、

コメント(小菅伸彦

告で山本さんはまさにこの点を突き、「ニコニコ努力してい 活動に携わっている。この活動を通して、 が中心となって行なっている避難者の子どもたちの教育支援 るが大人のいざこざのなかで子どもたちは傷ついてい 相当なストレスを感じていることに気づかされた。 いことがわかり、 つ ている」と実感することが大事だと感じた も妻とともに被災者の支援活動に関心を持ち、 にはハッとさせられた。子どもたちにとって「つな 父親と離れ、 避難生活を送る子どもたちが 母子避 難家族 今日 現在、 る」と が多 -の 報 妻

> ある。 ず、 ない、 0 たといったことが多々あった。 が関の役所の、 現場の生々しい様子が伝わった。このなかで感じたのは、 災地に掲示する様子がジャーナリストの立場から報告され、 メッセージに対する反応を続けていく努力をしていくべきだ と思ったが、今回の震災ではそうならないよう、 敵視した国々である。 受けていた。これらABCDは、 玉 (一九二三年) の が感謝の気持ちを込めてカナダに発信するという「つながり が発信したキルトのメッセージを、 原 連鎖」を大切にすることが重要だ。 (B)、中国 (C)、オランダ (D) から日本は国際支援を 野先生の報告では、 プロの映像の美しさに圧倒された。 発問題に関してブログに書いてい 実際、 義援金で調達した洗濯機が届くのに時間 お年寄りが多く身を寄せる避難 の直後、 被災者の個々の生活に対する想像 なんと日本は恩を忘れるの アメリカ(A)、イギリスと英連邦諸 地元のメディアが手書きの新聞 エコノミストとして私は今回 わずか 今度は日本の子どもたち るので参照され 数年後、 カナダの子どもたち 実は、 がに が 関東大震災 相当 燃料 が早 日本が 力の欠如で 発信され かか ۲, が ・国だ か 5 た

(http://nkosuge.blog3.fc2.com/blog-date-201206.html)°



コメンテーターの小菅伸彦先生



オーハマ監督に通訳する小野尾光平さん



司会の矢頭典枝先生(当研究所副所長)